

農の架け橋 地域と共に

— 白子町農業委員会だより NO. 27 —



令和2年1月
編集・発行/
白子町農業委員会

農業委員及び農地利用最適化推進委員を皆さんに紹介します。

女性の力で農業が変わる！社会が変わる！

白子町五井 田邊 淳子 さん（農業委員）

「ほんと、自分でも気づかないくらい夢中で走ってきた…楽しかったのかな？ でも、今、こうして家族3人でトマトを作ってるんだから、やっぱり、その瞬間、瞬間が楽しいんだよね！」農業をされていて楽しい時？の問いに、田邊さんは、微笑みながらこう答えてくれました。五井西地区において、トマトの養液栽培を、夫の一也さん、長男の良太さん とともに取り組んでいます。

高校の同級生だった一也さんと恋愛結婚、白子町に嫁いできた。初めは、家事、子育てをしながら農業を手伝う程度であったが、平成8年に一也さんが、土耕から水耕栽培に切り替えるタイミングに本格的に経営に加わった。

「私にとって、トマト作りって子育てのよう。楽しい時、厳しい時があって、子どもたちは、どんな時も笑いかければ笑い返してくれる。いろいろな人に助けられ見守られながら、お互いが少しずつ成長していく。私も多くの赤い子どもたちを育てたから、少しは成長したかな？」とおどけた。その脇で、就農して6年になる 良太さんが笑う。東京で音楽関係の仕事をしていたが、両親が一生懸命働く姿を背中を感じ、帰郷就農した。一也さんから農業を学び、現在、“これからの農業のかたち”を家族皆で話し合っている。

「女性農業委員として3期目となり、多くの人たちの出会いが、私の狭き世界を大きく広げてくれた。豊かな農村を守り、地域農業を豊かに元気にしていくためには、女性ならではの視点や感性が必要。町の次世代の農業者、または女性が意欲を持って働けるよう、農業委員として頑張りたい。」と語ってくれました。委員会の中でもムードメーカー的存在な田邊さん。明るく笑顔で元気いっぱい話す姿に、母親の包み込む優しさと女性農業者としての熱い思いを感じました。



【温室環境は制御装置により一括管理されている】



【たくさんの赤い子どもたちに囲まれながら】

「龍神を造った男たち」ー両総用水について ①

白子町の水田は約800ha。生命の水となる用水は遠く利根川から運ばれてきています。この用水には利根川の水とともに、長く、そして重い歴史が流れています。

『上総、下総の野山に横たわる幹線水路。満々たる利根川の水を吸い上げた巨大な鉄管は、龍の背のごとく銀の光に輝きながら、山を登り、谷を渡り、丘をくぐり、野を下って、その水を遠く九十九里平野へと運ぶ。』

今回は、その「両総用水」について、2回に分け、触れていきたいと思います。



○千葉県農業を変えた両総 ～両総用水事業～

両総用水の地域は、千葉県の北東部にあたり、利根川の支流である大須賀川沿岸、九十九里浜に注ぐ栗山川沿岸及び九十九里浜に沿って広がる一宮川までの九十九里平野の大部分の耕地によりなっています。太平洋に面しているため好気象に恵まれながらも、背後の丘陵地帯の分水嶺が平野部に接近していることから、耕地面積に対し集水区域が少ないため、その大部分が天水(雨)田であり、一度日照りが続くと水田は荒野と化してしまい、一方、利根川沿岸佐原地域は低湿地帯のため年々水害の脅威にさらされ、農家の努力も水泡に帰する状況であったようです。

昭和8年、今までに経験したことがない大干ばつに見舞われます。泥田さえ干からびて、夜逃げをする農民が続出。また、水を巡って当時の水利組合長が刀で切られるといった恐ろしい事件が発生してしまいます。その翌年も、前年に劣らない干ばつが襲います。そして、昭和15年、記録に残る大干ばつが発生。水争いする水すらなく、借金のかたに屋敷や田畑を没収されるなど農民の暮らしは窮まります。

そこで構想が練られたのが、利根川から水を引くという遠大な用水事業計画です。当時の福岡村(現:大網白里市)の村長 十枝雄三氏 が立ち上がります。十枝氏自らは当時、小中池、松之郷池の築造に奔走していたが、この惨状に際し、「ため池では限られた地域しか潤せない。すべての村を救わねば意味がない。そのためには、利根川の水を引くしかない。」と考えました。

一方、佐原でも、3年に1度の水害を絶滅すべく奮闘している男がいました。県議会議員の坂本斉一氏 です。県議会議員に選出された十枝氏は坂本氏と知り合い、九十九里平野の用水事業と佐原地域の排水事業を一括りに合理的に進めようと、大事業の実現に力を合わせていくことを誓い合いました。昭和16年、県は両総用水事業を決定。しかし、巨額の事業費や事業が長期にわたることを理由に、政府は国家事業として認めてはくれませんでした。そのような中においても、十枝、坂本両氏は、両総用水期成同盟連合会を組織し、精力的な請願活動を続けます。そして、昭和18年、両氏の熱意が実り、両総用水事業は、戦時下の食糧増産計画として採用、農地開発営団の事業として決定をみました。

上総と下総を結び、広大な耕地を潤すという両総用水事業は、当時としては画期的なものでした。昭和18年4月、佐原に事務所を設置し測量を開始、7月には起工式を挙げ、いよいよ掘削の開始となったものの、戦局の悪化とともに暗雲が立ち込めます。人力による掘削と資金不足のため工事は停滞し、そこに終戦が重なり、工事は完全中止状態になってしまいました。

(~次号へ続きます~)



十枝雄三氏



坂本斉一氏